

第5回 町民人権講座

生まれつき悪い子なんていない
～奈良少年刑務所 絵本と詩の教室～

[講師] 寮美千子さん



作家・詩人の寮美千子さんをお招きし、ご講演をいただきました。寮さんは、ふとしたことから、奈良少年刑務所の少年受刑者を対象として、詩や絵本を使って教育を行う「社会性涵養プログラム」という独自の取組みの講師を半年間（毎月1回）依頼されました。しかし、相手は窃盗や殺人など重罪を犯した受刑者ばかりで、人生を踏み外した彼らに、なにかいい影響を与えられるのか、全く想像できなかったそうです。寮さんは、子どもたちがリラックスできる授業にしたいと考え、子どもたちの言うことを「否定」しないことを大切にされました。ここにきている子どもたちは、自分が家庭や周りの大人たちから人間扱いされることがなかったから他人にしてあげることができない。その子たちに自然体で接することで仲間感が生まれてくると考え、授業を続けられたそうです。

2024 10/24 thu

5期目の受講生の一人が書いた詩に「空が青いから白を選んだのです」という詩があります。普段、あまり喋らない子が、この詩を朗読したとたん、たくさん語り出したそうです。「お母さんが亡くなる時に『辛いことがあったら、空を見て。そこに私がいるから』と言ってくれたそうです。お父さんは、いつもお母さんに暴力を振っていたが、身体が小さかった自分は何もできなかった。空にいるお母さんを見つけやすいよう、自分は雲のような白を選んだという詩を聞いた時、教室にいた他の受講者から「この詩を書いたことが、親孝行だと思いました」など反響が大きく、自分の書いた詩が皆の心に届いたと感じたその子の表情は、晴れ晴れとしていたそうです。その後、その子は作業場の副班長を務め、他の受刑者の人生相談を受けるまでに成長したそうです。

受刑者の子ども達は、加害者であると同時に被害者でもありました。心を閉ざしてしまっていた子ども達は、寮さんの授業を受け、その授業を受講した186人全員がいい方向に変わっていくことができたそうです。寮さんは仰っていました「刑務所の高い壁は、受刑者を閉じ込めておくためだけのものではなく、彼らを一時的に守る防波堤である」と。それぞれの家庭で、無理に励ますのではなく、その子の今を受け入れてあげる、そしてその子を信じてジッと待つと、子ども達に安全安心な場所を作ってあげることが大事であると寮さんは教えてくれました。

涵養、否定しない、説教しない、安全安心な場所と時間、弱音を吐ける場、家庭や学校や地域の中のどこかにこんな場所があれば、子どもは、(大人も)救われるんだと思います。

評価されない空間、子どもたちにはないと思いました。子どもたちに傷ついて欲しくない、成長して欲しいと思う。親のエゴが強すぎたと反省しました。お話、とても面白く聞かせていただきました。「くも」の詩、感動しました。

「安心安全な場所と時間を確保することによって、人は自分の中にあるよい種を芽生えさせることができる。それを実感できるように、自分の行動を改めなければならないと強く思った。

第6回 町民人権講座

このまちが好きだから

[講師] 藤尾まさよさん



2024 11/17 sun

崇仁発信実行委員会代表の藤尾まさよさんを講師としてお招きして、講演会が開催されました。藤尾さんは、息子さんの通う中学校のPTA役員を務めたことがきっかけで、人権学習に出会い、人権について学ぶことの大切さに気づき、さまざまな人権啓発活動を行うようになったとのことでした。講演では、差別を受けたつらい経験や人権学習の大切さについて、詳しくお話してくださいました。

以前は、「人権学習？差別したらあかんってことやろ。わかってる。」といった感じで、自分では人権について理解しているつもりでいたそうです。しかし、職場で上司から差別的な扱いを受けたり、結婚差別のため長く付き合った方も結婚できなかったり、そんなつらい差別を受けても、「差別されるのは、差別される場所に生まれた自分が悪い。」と考えていた時期もあったとのことでした。差別を受けてもどう対応していいのかわからず、家族に当たり散らしたり、自殺を考えたりしたこともあったそうで、差別や人権に関する知識・理解が不足していたことを反省しておられました。人権学習に出会い、自分に足りなかったことは、わかったふりをして人権について学んでこなかったことだと気づき、学習を進めていく中で、差別に立ち向かう勇気・力を得ることができたそうです。

講演の中で藤尾さんが話されていた、「差別・偏見は、誰の心の中にもある。それに気づいて改善していくのが人権学習である。人権学習は『幸せの学習』である。」という言葉が、深く印象に残りました。

「人権学習=幸せの学習」、子どもたちにも伝えたいです。理解力がある人、自分を理解してくれる人がそばにいる安心感、確かにそうだと気づきました。私も周りにいる人を安心させ、幸せにできる人になりたいです。

正しく知って正しく理解することの大切さを改めて感じました。「自分の考え方がみんなを幸せにしているか」新しい視点でした。

一人の一生の中に部落差別が入っていることの重みが伝わってきた。いつまでもどこかで、まだ繰り返される差別は1日も早く解決し、無くなることを切に願います。

人権について考えよう

12/4(水)から12/10(火)の1週間を「第76回人権週間」と定め、全国各地で多数のイベントが実施されました。美浜町でも、この人権週間に人権作品の入賞作品展示や人権協の活動紹介コーナー、人権共同作品の体験コーナー等を設け、多くの方々に人権について考える場を提供させていただきました。

人権協活動紹介



人権作品展示



福井県の人権啓発



体験コーナー

みんなの笑顔がかがやく美浜

笑顔を描いて 美浜をいっぱいにしよう!

人権コラム

はたして大仏は人々を救ったのか?

「執筆」美浜町文化財保護グループ 小牧 拓矢

私は、大学で仏教美術の歴史を勉強していました。仏画や仏像などは人々の生命や生活の安寧を願って作成されることが多く、その理念は現代の「人権」の考え方にも通じるといえます。しかし、本来ありがたい存在である筈の仏像が逆に多くの人の生命を脅かすことになってしまったことがあります。

その悲劇をもたらしてしまった仏像とは何を隠そう東大寺の大仏です。盧舍那仏とも呼ばれるこの大仏は、天平15年(743)に時の天皇聖武天皇の勅命により国家事業として造仏が開始されました。この時期、国内では疫病や自然災害が立て続けに発生しており、国全体と人々の生活を仏教の力で守るための一大プロジェクトでした。一説ではこの大仏の建立に関わった人数は当時の日本の人口の約半数に値する260万人にも上ったと言われています。

高さが16mにもなる大仏の体を形作るために使われた金属の量もまた莫大で、銅が約500トン、錫(スズ)も約8・5トンが使われたと試算されています。これだけの量の金属を日本各地から平城京に運び、この金属を1000℃まで熱し、液体となった青銅を仏身となるよう固める作業が命がけであったことは想像に難くありません。

ですが、最も危険だったのは金メッキを施す作業でした。当時は金を塗る際、水俣病の原因にもなった有害な金属である水銀を溶かしたアマalgamという合金が利用されていました。この作業で大量の水銀を蒸発させた事により、多くの作業にあたった人々や周辺の住民の体内に吸収され、深刻な健康被害を与えたと考えられています。

勿論、当時の人々は水銀が体に悪いこと自体知る余地もありませんから、作業は続き大仏の完成まで何年も続きました。このように人のために行われる事業であっても、方法を間違えれば逆に人権を脅かすことがあるのは現代も同じでしょう。このような歴史的な事柄から、私たちが学べることは多いのではないのでしょうか。